

説教要旨「安息日の主」

ルカによる福音書6章1～11節

「安息日」に係わって、ファリサイ派や律法学者と論争が巻き起こります。

『安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、

悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。』(9節)

ここでイエス様がどちらかと問うておられることは二つとも、何かを「する」ことです。ファリサイ派の人々は、安息日は何かを「しない」日だと思っています。人間の営み、仕事を「してはならない」日が安息日であり、そのしてはならないこととは何か、とのリストを作り、イエス様や弟子たちを律法違反だと言っているのです。しかしイエス様は、その「してはならない」という戒めによって神様が私たちに求めておられるのは、み心に従って善を行い、命を救うことだと言っておられるのです。

『人の子は安息日の主である。』(5節)

人を安息日の奴隷にしたのは、ユダヤの宗教家たちでした。麦畑で空腹を満たした弟子たちを、「そうら、安息日に刈り取りと脱穀の作業をした」と、鬼の首でも取ったように指弾したのもそのためです。しかし、安息日に込められた神様の思いは、人間が労働とともに際限の無い貪欲の泥沼に沈まぬよう、いつも命の源に戻って信仰の足場を確認できるよう、そして、安息日を定めた神の心で人に仕えることができるよう…そんな温かい御配慮なのです。

私たちはともすればイエス様の教えを、ファリサイ派の人々と同じような思いで受け止めてしまうことがあります。つまり、してはいけないことのリストを積み上げて、それを守ることが信仰であると勘違いをしてしまうのです。そこには、人から批判されることを恐れてばかりいるような、喜びのない、消極的な信仰生活しか生まれません。主イエスの福音は、「あれをしてはいけない、これは相応しくない」という消極的な教えではなくて、神様と隣人を愛して、善を行い、命を救うことに積極的に喜んで生きることを生む教えです。私たちはそのような積極的に喜んで生きる歩みへと、み言葉によって押し出されていくのです。

(2018・7・22 説教者：稲垣真実)